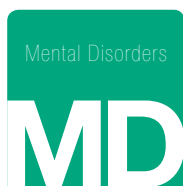


取材日：2018年5月31日



精神疾患



東京都区西部医療圏

大学病院と地域の専門医、非専門医との連携で精神医療における多剤大量処方への解決に臨む。

Point of View

- ① 大学病院と地域の診療所が多剤大量処方を解消するために必要な連携体制の構築に向け、話し合いや交流の機会を持つ
- ② ひとりの患者をとともに診療しながら情報を共有し、連携しながら薬剤減量を実現
- ③ 専門医、非専門医、そして患者や家族を対象にした精神医療に対する知識の共有を図るための勉強会開催を計画中

東京医科大学精神医学分野
東京医科大学病院メンタルヘルス科
主任教授

井上 猛先生

東京医科大学精神医学分野
東京医科大学病院メンタルヘルス科
准教授

市来 真彦先生

医療法人社団慈泉会
市ヶ谷ひもろぎクリニック
理事長

渡部 芳徳先生

あおきクリニック
院長

青木 正先生

医療法人社団千紀会
吉田クリニック
院長

吉田 克彦先生

多剤大量処方の解決に向け地域医療連携の構築を図る

現代の精神医療の大きな問題のひとつは多剤大量処方だと言われる。医療全般で問題になっている、特に高齢者に対する多剤服用（ポリファーマシー）とは違う意味での深刻さをはらんだ問題だ。その解決には、精神科分野の診療科を有する大規模病院、精神科分野の専門病院、専門診療所、非専門診療所の連携が必須だと考えた東京医科大学病院メンタルヘルス科では、まず紹介・逆紹介の実績のある診療所の医師たちと話し合いの機会を持ち、地域での理想的な連携体制を構築しようと動き始めている（【資料1】）。今回の集ま

りも、そうした一環としての意味合いを持つものだ。

最初に、同科主任教授の井上先生が、同院の立地する新宿区内の連携の現状について説明する。「新宿区内で目立つのは、高齢者の認知症やうつ病、サラリーマンの過労やハラスメントからくる適応障害や不安障害、うつ病などです。かか

りつけの内科診療所の先生方からは高齢患者の紹介が多く、その際には当院の認知症疾患医療センター、高齢診療科、そして私たちメンタルヘルス科が連携・協力しながら診療をしています」（井上先生）

あおきクリニック院長の青木先生は、東京医科大学病院によく患者を紹介すると言う。



左から井上先生、市来先生、渡部先生、青木先生、吉田先生

「新宿区に隣接する中野区東中野で精神科を掲げて開業していますが、中野区でも、高齢のうつ病患者は多く、連携先の東京医科大学病院にはたいへんお世話になっています。うつ病に限らず、難しい症例に関しては、診療中に電話で紹介をお願いします場合もあります」（青木先生）

青木先生が電話で紹介を依頼するのは、東京医科大学病院メンタルヘルス科准教授の市来先生だそうだ。「青木先生とは親しい関係なので迅速な連携ができていますね。ほかに近隣の内科診療所の先生方とも連携をしています。」

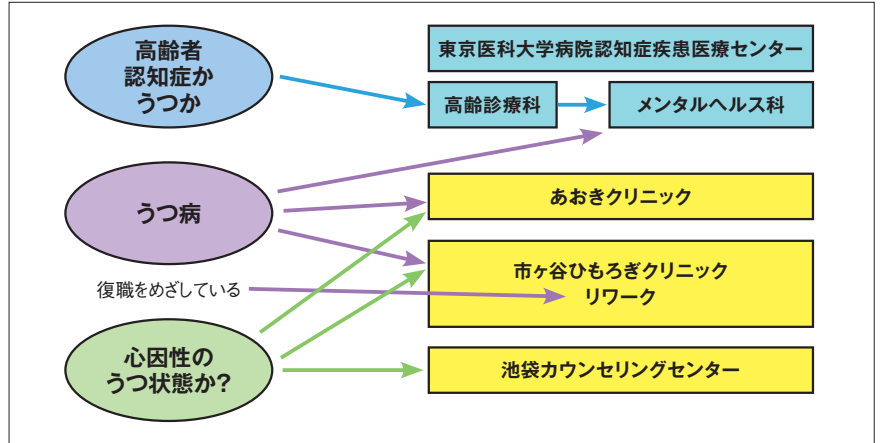
最近の内科の先生方は、不眠やうつを訴える患者さんを積極的に診てくださるのでありがたいのですが、症状が悪化してからの紹介も少なくありません。内科の医師と精神科の医師との交流の機会があれば、もっとスムーズに連携できるようになるのではないかと感じています」（市来先生）

診療所の医師が大学病院への紹介で悩むのはタイミング

青木先生と同じく精神科専門医の市ヶ谷ひろぎクリニック理事長の渡部先生は次のように語る。「当院は、市ヶ谷という交通至便な場所にあるのに加えて、心療内科のほかにも泌尿器科などの身体系診療科も標榜しているので、首都圏の広範

【資料1】

現在の東京医科大学病院と専門診療所の役割の例



出典：井上先生提供資料

困から大勢の患者さんが来院されます。心療内科で多く診ているのは、うつ病や双極性障害など。力を入れているのは、カウンセリングをメインとする診療とリワーク（復職のサポート）です」（渡部先生）

同院では、同じ精神科の診療所からの紹介患者を受け入れる一方で、大学病院に対する患者紹介も行っている。

「当院では、精神科の専門診療所からリワークの依頼と、薬剤減量に取り組んでいるので、多剤大量処方になっている患者さんの紹介が増えていますね。一方、当院からのほとんどの紹介先は大学病院で、精神疾患を持ちながら内分泌疾患などの身体疾患のある患者さんと、薬剤減量のための入院治療を要する患者さんなどを診ていただいています。」

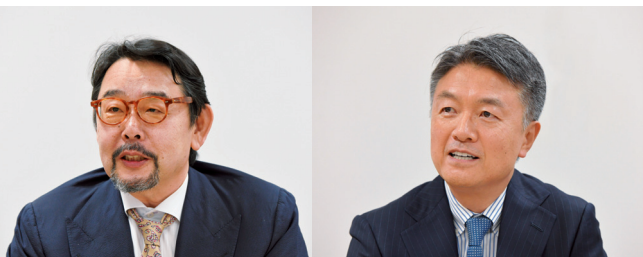
希望を申し上げるならば、紹介先の大学病院に、外来治療だけでは困難な症例に対し、たとえば最大約3ヵ月の入院による薬剤減量プログラムなどで対応

してもらえるシステムがあると、医師も患者さんも安心です」（渡部先生）

精神科の非専門医の先生方は、連携についてどう考えているのだろうか。杉並区の荻窪に立地する、整形外科と内科を標榜する吉田クリニックで院長を務める吉田先生が語る。「杉並区は、さまざまな所得の方が住む地域で、当院には高齢者からその孫の世代まで幅広い年齢層の患者さんがいらっしゃいますが、近年、日々の診療の中で気になるのは、長期にわたって改善の見られない腰痛や、思春期の体調不良による不登校などです。」

背景に身体的な基礎疾患があるのか、あるいはメンタルな問題があるのかを見きわめて、メンタルに関する診療が必要だと判断した場合は、近隣の専門診療所や親しくさせていただいている市来先生に紹介しています。

現在は、精神科分野では診診連携が大勢を占めています。大学病院へは、どの程度の症例なら紹介していいものか悩んでしまってハードルが高いですね。明らかにメンタルの間



題があったとき、どのタイミングで紹介すればいいのかの基準がわかれば紹介しやすいと思います」(吉田先生)

連携がなければ医師同士で最新の情報を共有できない

多剤大量処方を解消するために連携の構築に向け動き出した理由の一部を市来先生が解説する。「大学病院と診療所の連携が機能していないと患者さんが薬漬けになってしまうリスクが生じます。近年、不安に対しても非常に効果の高いSSRI系の抗うつ薬が出てきていますし、薬に頼らないカウンセリングを中心とする治療方法もあります。しかし、連携関係がないために、そういった情報を診療所の先生が共有できず、ふらつき・転倒や依存による大量化が心配されるベンゾジアゼピン系薬剤を長期にわたって処方しているケースが多々あります」(市来先生)

青木先生からは多剤大量処方の実態が語られた。「複数の専門診療所、非専門診療所に通院している患者さんにおいては多剤を処方されている事態に医師が気づけないケースがあります。

また、故意に複数の『お薬手帳』と薬局を使い分けて、大量の薬剤を入手する患者さんもいますし、『治らない、治らない』とドクターショッピングを重ねて、結果的に多剤大量処方に陥っている患者さんもいます」(青木先生)

地方での診療経験のある渡部先生は、多剤大量処方には、地域性も関係しているのではないかと話す。「地域に専門医がひとりしかいなければ、どうしてもひとりよがりな診療に陥りがちになり、最新の診療や

薬剤に関する情報からも遠ざかりやすくなります。同じ医師が長く診療を続けて、いつの間にか多剤大量処方になっている。あるいは、処方をやめるのに困難がともなう三環系抗うつ薬を使い続けている。地方ではそういった問題が起こっている可能性があります。

一方、都市部では紹介先の選択肢は多いのですが、それゆえ考えているうちに紹介するタイミングを逸するようになることが起こりえます」(渡部先生)

「だからこそ、確かな連携が必要なのです。患者さんが、適切なタイミングで適切な治療を受けられる連携と、連携の中で多剤大量処方を解消していくことが、今、求められています」(井上先生)

紹介元の医師とともに薬剤減量に取り組むスタンス

井上先生の言葉を受けて、話題は連携の具体的な部分へと移っていった。吉田先生が問う。「先ほども申し上げたように、専門医への紹介では適切なタイミングがいちばん悩むところです。大勢の患者さんを診てお忙しい大学病院や専門診療所に、こんな軽症の患者さんを送っていいものかと思ったり、でも、もしかしたら自殺企図のような重症の兆候を見逃しているかもしれないと不安になったり。非専門医で

【資料2】

2018年2月に開催した勉強会の内容

メンタルヘルスネットワーク
～“うつ”をこじらせないための地域連携を考える～

Opening Remarks	東京医科大学病院メンタルヘルス科主任教授 井上 猛 先生
Discussion	司会 あおきクリニック院長 青木 正 先生 東京医科大学病院メンタルヘルス科准教授 市来 真彦 先生

テーマ「かかりつけ医・専門医の連携の在り方」

症例&課題提示 —プライマリーケア医の立場から—
吉田クリニック院長 吉田 克彦 先生

◆ディスカッサー

メンタルクリニック	あおきクリニック院長 青木 正 先生
リワーク	市ヶ谷ひもろぎクリニック理事長 渡部 芳徳 先生
大学病院	東京医科大学病院メンタルヘルス科准教授 市来 真彦 先生

特別講演
『地域における理想的なうつの治療と連携アルゴリズムを考える』
東京医科大学病院メンタルヘルス科主任教授 井上 猛 先生

もわかりやすい、紹介するタイミングの判断基準はありますか？」(吉田先生)

即座に渡部先生と市来先生が答えてくれた。

「たとえば、痛みがあって鎮痛剤だけでは治まらず、不安障害の合併が疑われれば、抗不安薬ではなく、抗うつ薬を単剤で少量使ってみるといいでしょう。それで症状が改善したならメンタルの問題があっても軽症です」(渡部先生)

「あとは、すべての向精神薬を処方するときに必ず限界設定をして、それを患者さんにも事前に宣言しておくことをおすすめします。

ある薬を使い始めるときに『3ヵ月たっても症状が改善しなかったら精神科に行きましょう』とお伝えして、時期が来て改善が見られなければそのとおりに紹介をする、といった感じはどうでしょう？」(市来先生)

「私のようなかかりつけ医は、抗うつ薬を単剤で少量、それも期間を限

って使ってみる。それで改善があればメンタルの問題はあっても軽症なので、すぐに専門医に紹介しなくてもいい。それでも、もし患者さんが希望するなら、あるいは処方した少量の抗うつ薬で改善が見られないなら専門診療科にお送りする。なるほど、とてもわかりやすいです」(吉田先生)

渡部先生から要望のあった多剤大量処方に陥っている患者に対する薬剤減量プログラムの対応に関しては井上先生が回答する。

「当科ではパスのように決まったプログラムを用いているわけではありませんが、市来先生はかなり先駆的に薬剤減量に取り組んでおられ、診療科をあげて実践しています」(井上先生)

「具体的には、多剤大量処方が疑われる患者さんが紹介されてきたならば、まず、紹介して下さった先生へのお返事に『昔は当たり前のように行われていた多剤大量処方が現在問題になっているのでご注意くださいね』と協力を仰ぐ内容を書き添えます。そして時には薬の処方はそのまま紹介医にお願いして、当科では診立てのみの診療を行い、『そろそろこの薬をこのように減らしてみたらいかがでしょう』というスタイルでお手紙を書いて、次回お薬手帳を見せていただくようにしています」(市来先生)

相互の絶対的な信頼関係が 不可欠な精神医療の連携

診療所の先生方との連携にあたっての心がまえを井上先生が語る。「大学病院と診療所の連携については、私が若いころによく言われた言葉をお手本にしています。『ほかの医療機関の医師を批判しない、でき

る限り仲良くする。それが患者さんのために良いことだ』。

お互いの専門性を尊重し合えなければ良い関係はつくれません」(井上先生)

「連携ではよく『顔の見える関係』が大切だとされますが、精神医療分野では、単に顔と名前が一致する程度の顔見知りではなく、互いの医療に対する考え方や患者さんに対する姿勢、診療体制や薬剤の使い方などまでを知ったうえで、絶対の信頼を置ける関係を築かなければならないと考えています。先述の『一緒に診ていきましょう』も、診療所の先生方とそういった関係をつくるための大切なプロセスです」(市来先生)

診療所との連携のメリットを市来先生が続けて話す。

「吉田先生のような地域のかかりつけの先生方が、真の患者さんの情報を持っているものです。病院の専門医には話さないようなことを診療所の先生や看護師には話していたりする。それらの情報を提供いただければ、患者さんの治療に大いに役立ちます」(市来先生)

「だから、幅広く非専門の先生方も交えた地域の連携体制をつくる必要があります。それには、お互いを知る機会を持たないとはいけませんね」(井上先生)

井上先生は互いを知る機会をつくるのは大学病院の使命と考え、精神医療の知識の共有を図るための勉強会の開催を計画している最中だ。

「顔を合わせて話し合い、いずれ気心の知れた関係に発展させていくには、勉強会(【資料2】)や交流会の開催が有効でしょう。

対象は専門医、非専門医、そして患者さんやご家族と幅広く。すでに認知症疾患医療センターが企画する研究会や講演会では、非専門の先生

方に広く参加を呼びかけ、交流の機会が生まれています」(井上先生)

重ねて大学病院のもうひとつの使命についても言及された。

「市来先生は、研修医をともなって訪問診療を行う取り組みを始めていますが、このような後進の教育も大学病院の重要な役割です。地域での精神医療を身をもって学んだ医師が多教育でば、やがて、大学病院を出て地域での専門的な診療に取り組む者も増えていくでしょう。そうなれば、地域の大学病院と診療所の連携体制は、より強固になっていくはずです」(井上先生)

多剤大量処方などの問題を抱えている精神医療だが、その解決への道筋は確かに見えている。この日の話し合いに参加してくれた医師たちがコアとなって、その道先導してしてくれるだろう。

東京医科大学病院

〒160-0023
東京都新宿区西新宿6-7-1
TEL: 03-3342-6111

医療法人社団慈泉会 市ヶ谷ひもろぎクリニック

〒162-0843
東京都新宿区市谷田町2-31-3
市ヶ谷ASUKARAビル2階
TEL: 03-5946-8586

あおきクリニック

〒164-0003
東京都中野区東中野3-8-13
MSR東中野B1階
TEL: 03-5348-2533

医療法人社団千紀会 吉田クリニック

〒167-0043
東京都杉並区上荻1-18-12
春木屋ビル2階
TEL: 03-5347-7300